

と ドクターは 麻酔小児科 大切だ

《麻酔科医、小児科医》

妊娠・出産では、産婦人科医の他にいろいろな科の医師にお世話になる場合があります。特に重要なのは、麻酔科医と小児科医です。

済生会新潟第二病院の場合、帝王切開の麻酔はすべて麻酔科専門医が行います。帝王切開の麻酔は通常、脊髄を包む硬膜・くも膜の中に少量の局所麻酔薬を注入する「脊髄麻酔」が行われます。この麻酔自体は比較的簡単ですが、麻酔直後に血管が拡張して血圧が急激に下がり（特にお腹の大きい妊婦さんは著明）、また胎児が出た後は急に心臓に戻る血液が増えたりと循環動態の急変が起こるので、麻酔科の先生に管理してもらえると安心です。さらに麻酔科の先生は、硬膜の手前の間隙に局所麻酔薬を注入する「硬膜外麻酔」も行ってくれます。硬膜外麻酔では、麻酔効果を腹部のみに限定でき（従って歩行も可能）、チューブを留置してそこから麻酔薬を持続

注入することで数日間鎮痛を得ることができます。これにより、術後は楽に早く動け、授乳や赤ちゃんの世話ができます。

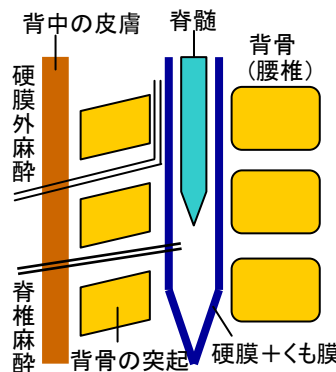
最近では全出産の25%が帝王切開であり、4人に1人が麻酔科の先生のお世話になることとなります。帝王切開中産科医は手術に必死で、赤ちゃんを取り上

げておきながらその子が男か女かも見ていないくらいです。一方、麻酔科医は妊婦さんの頭のすぐ横に立っていることもあり、赤ちゃんのこと、旦那さんのこと、命名のこと、ローカルな話題などで妊婦さんと話が盛り上がっています。麻酔が良く効いて「楽だった」だけでなく、麻酔の先生が面白くて「楽しかった」という感想をよく耳にします。

一方、小児科医にお世話になるのは、生まれた赤ちゃんの具合が悪い場合で当院では全体の3.8%でした。小児科入院となった原因疾患としては、早産や胎児発育制限で低出生体重だったケースが最多で、次いで出生後に呼吸異常となった場合、低血糖、黄疸が続きます。これらの赤ちゃんに対して小児科医は、保育器での酸素投与や呼吸補助、点滴や経管栄養などの治療を行って育ててくれます。こうした赤ちゃんこそ母乳の意義が大きく、お母さんは一所懸命母乳を搾って届けるように言われます。

このような異常がなくとも、実は全部の赤ちゃんは入院中に小児科医の診察を受けていますので、100%お世話になっているのです。さらに最近ではプレネイタル・ビジット（出生前小児保健指導）といって、妊娠中に小児科医と接触し、育児の心構え・イメージ作り、母乳育児や離乳食など栄養指導、赤ちゃんの一般的なよくある症状の説明、予防接種や乳児健診の情報を提供してもらうこともよく行われています。

当院は麻酔科医6名、小児科医5名の豊富な体制ですので、妊婦さんはもとより、われわれ産科医も安心して診療ができています。



ち 乳は出る吸い手が2人いるからね

《母乳育児》

和歌の枕詞に「たらちねの」があり、これは「母」を導きます。「たらち」は垂乳または足乳という字が当てられ、乳を垂らすまたは乳が足りているという意味です。また「ね」は根の意味で足元がしっかりしていることを表します。すなわちお乳と愛情をいっぱい持って、赤ちゃんを安心させてくれるのがお母さんということでしょうか。

古くは万葉集に、「たらちねの 母が手放れ かくばかりすべなき事は いまだせなくに」と詠まれています。母の手を離れ大人になりつつある少女が恋の苦しさを知ったのです。今上天皇陛下の皇太子時代の御製に、「やすらぎに 面はみちたり たらちねの 母のまなざし 受けて眠る子」があり、温かい母の愛が美しく詠まれています。

このように母乳はまさにお母さんの象徴ですが、母乳で赤ちゃんを育てることは決して難しいことではありません。母乳が良く出るためには、赤ちゃんが乳首を吸ってくれることが一番大切です。この刺激により吸啜反射が起こり脳（下垂体）からプロラクチン、オキシトシンというホルモンが分泌され、それぞれ乳汁の産生、分泌を起こします。

まずは妊娠中から、乳首を柔らかく皮膚を丈夫に手入れし、赤ちゃんが乳首を吸いやすい状態にしておく必要があります。次に赤ちゃんが生まれたらすぐに初回の授乳（実際にはほとんどお乳は出なくていいのですが）を行います。これによって赤ちゃんは「これが自分のおっぱい」と認識し、お母さんにも上述の反射でおっぱい製造のスイッチが入ります。さらにお母さんと赤ちゃんは常に一緒にいて、欲しがったらすぐに欲しがるだけ授乳することが大切です。このほか、赤ちゃんが乳首を深く含むようにすることや、各自の乳房や赤ちゃんに適した抱き方の工夫等の技術的な問題もありますが、これは当院の助産師が教えてくれます。1989年にWHO（世界保健機構）とユニセフが勧告した「母乳育児を成功させるための10か条」にもこうしたことが謳われています。

こうした頻回授乳が、母乳育児の成功のために最も大切であることを示す実例があります。それは双子に対する母乳育児です。当然2人分のおっぱいを出さなければならないわけですが、赤ちゃんが小さめなことも加わって、母乳育児は難しくなります。しかし、済生会新潟第二病院での双子のお母さんの実に61%が1カ月健診時点で母乳だけで赤ちゃんを育てています。2人の子が代わる代わるおっぱいを吸いますから、相当の頻回授乳になるわけで、その吸啜によって2人分の母乳が出るのです。

もちろん母乳の出方には個人差があり、最初から噴出する方もいれば、軌道に乗るまでに日数を要す方もおられます。「何が何でも母乳で」と自分を追い込まずに、最初は糖水やミルクを足しても全く構いません。退院時で92.9%、1カ月健診時で82.6%の方が母乳のみで赤ちゃんを育てている当院ですが、入院中に22.6%の方が糖水かミルクを補足しているのです。

